

第十野戦航空修理廠

少年軍属・軍人

放浪の終戦後

福井県 笠 島 賢 二

私が幼少のころのアジアの諸国は、欧米列強の植民地であったり属国のような状況であったことは、当時の世界地図を見ても明らかでした。幼な心に、どうしてこのようになったのだろうと思ったことが今でも思い出されます。

私は昭和十七（一九四二）年四月十一日、満州国三江省佳木斯第十野戦航空廠、満州第八三五部隊の南隊に陸軍軍属工員として入隊しました。当時は、高等小学校卒業間もない十五歳の少年でした。今で申せば、高校受験時の年齢でありましょう。

昭和十六年十二月八日、大東亜戦争が始まり、私たち少年もお国のためと、見知らぬ満州の大陸にまで動

員されたのでした。その頃は国民皆兵、兵役は国民の三大義務（教育・納税と共に）であり、これを拒否することは出来ませんでした。そのため、学生でも毎日軍事訓練をしていたものです。

私は体こそ小さかったが、一人の日本男児として頑張ってきました。一週間の汽車の旅も何のそのと思っていました。現地についてびっくりしました。見渡す限りの文字通りの大陸、その中のボツンとした所に部隊がありました。「大変な所に来たものだなあ」と感じましたが、もうそんなことは言っておられません。

同期の工員は約八十人で、全国から集まって来た少年軍属隊でした。約三カ月間は、朝は軍事訓練で絞られ、午後は航空機の講義で、なお工具等の使い方等、本当に一日中くたくたで大変に厳しい毎日でした。そのようにしていつの間にか三カ月も過ぎ、短期教育終了によって半数の人達は分廠等に転勤していききました。多分、三個所くらいの分廠に行ったように記憶し

ています。

私は本隊勤務で、毎日飛行場にある整備工場に勤務をしました。文字通りの「一望千里」大変広々とした平原で、地平線が見えました。日本では到底見ることの出来ない体験でした。

そこには戦隊があり、戦闘機・軽爆撃機等が約三十機の飛行隊でした。私達の部隊はその戦隊の飛行機を整備するのが任務でした。

当時、日本は日満協同防衛の立場から全満州の要所に飛行機修理基地の工場の設置が開始されつつありました。牡丹江省（蘭崗）に第八野戦航空廠、龍江省（榆樹屯）に第九野航、三江省（佳木斯）に第十野航、賓江省（平房）に第十二野航等でした。各廠長（部隊長）は少将もしくは古参大佐で、三つの作業隊を持ち、作業隊長は技術少佐か大尉で、分廠長は中佐で、四個所の分廠があり、新京（長春）にある第二航空軍司令官の直轄隊でした。

秋もまたたく間に過ぎて、いよいよ冬將軍がやって

きました。満州の冬は本当に寒いのです。零下三十度くらいまで下がると、道路も川も一面真っ白の大地となりました。寒いのではなく冷たいのです。いや、痛いのです。防寒服を着て手袋をはめる。もし素手で鉄板に触れば手の皮はむけてしまうほどでした。

そのため、朝五時頃には暖房をしなければ飛行機は全部エンジンがかからないという大変な寒さであり、春は四月中旬にならないと暖かくなりません。それでも負けてはおられません。士官の命令で交代での夜間勤務でした。長い長い冬です。

年も明けて、昭和十八年十月頃に移動修理班が編成され、南満州の遼陽飛行場に転進してきました。兵隊及び軍属約七十人に高橋大尉が隊長で、機械、トラック、その他一揃いの機・器具を運んだのですが、ここもまた大草原でした。

滑走路も直線に一本で爆撃機、偵察機等二十機くらいの戦隊で兵舎もなく、全員天幕生活でした。大陸で風が強くと幕は地下一五〇センチくらい掘り下げて張り、夜は暗くろうそくの生活です。昼は良いのですが

夜は大変でした。食事も野外で炊き、炊事係も大変だったと思い、本当にご苦勞をかけるなあと、我々も作業に精出しておりました。

昭和十九年頃になると、B 29が来襲し、奉天（瀋陽）・鞍山製鉄所の工場地帯を毎日のように銃爆撃するようになりました。戦隊のパイロットは飛び立ちますが、戦闘機でないのでぜんぜん相手にされず通過していきます。その頃になって初めて台湾またフィリピンから来るらしい、との話が耳に入るようになりました。本土もこの頃になると大変だろうと、我々も感付いてきました。

極寒肌を刺すと言いますが南満州でも冬は寒く冷たい毎日でした。やがて昭和十九年の正月も過ぎ、一月に今度は関東州の三十里堡という所に転進しました。本土防衛のためだなと思えました。私達は南へと移ってきたのですが、関東州に來ると内地と同じくらいのもので海も見えたり、リンゴも多く栽培されていました。

航空隊は練習生隊でした。練習機の十二、三機が主として駐屯しており、練習操縦士養成の隊でした。飛行士は士官学校出身の若い士官でした。特攻隊員の教官だったのでしょう。私達は兵隊と軍属約五〇人の小人数でした。隊長は航技中尉で、飛行場までは山一つ越した海岸に近いところでした。

練習機には士官と後部に指導官が乗っての飛行が続き、しばらくすると一人で操縦して上昇するようになっていきました。時々失敗して機体は傷み、士官は負傷により病院へ、月に二、三人くらいは事故を起こしていたものです。今までに見てきたパイロットに比べると技術が劣るが、この人たちが半年もすると戦場に送られるために転属していくのです。すると、また新しい学生上がりの士官が来たものです。

戦争も終わりに近い六月頃に、私は陸軍部隊に入るべしと、召集令状が来ました。いよいよ来たかと思いながら見ると、新京の部隊に入隊との通知でした。私と同僚二人は、北上して歩兵隊に入隊しました。

忘れもしない、昭和二十年六月十五日だったとはっきり覚えています。その後二カ月で終戦になったので今でも忘れません。

歩兵部隊に入ると、現地召集兵の新兵に、予備役の古参兵でした。三個中隊に編成された隊でしたが、私たち二人は入隊手続きをしたところ、航空隊の軍属であつたことを分かつていたのか、本部付けにされました。新兵ですが、一応軍隊のことは他の人より体験がある。兵隊と約三年間も生活を共にしたのでですから、軍隊のことは何でも知っておりました。そのため、何かと便利に使われたわけです。

当番や士官の食事のこと、出来ないことはない。そうこうしているうちに部隊が転進したり、また鉦山のある町の小学校が駐屯地になりました。そこでも各中隊ごとに整理をしたり、隊長の訓示を受けたり、班長の名前もやっと知り、各人の持ち物も整備したりするうちに、大変な報があるからと全隊員が校庭に集合を命ぜられました。その日は昭和二十年八月十五日でした。すなわち終戦の紹書、敗戦が知らされたのです。

その時の気持ちは、言い表すことも出来ないショックでした。ここにそれを書く事も出来ないような衝撃でした。少年工員として、軍属として過ごした三年余は何のためだったのか、そして我々はこれから如何にすべきなのか……。

その時、私達現地召集兵は除隊という命令が出ました。皆、うろたえました。部隊は解体です。支給された物、軍用品は全部一カ所に集められ、「着た衣装はそのままで自由行動せよ」との隊長の指示がありました。

私は同僚と二人で、元の部隊の遼陽に徒歩で出発しました。約四日、鉄道線路を頼りに東か西かと歩き急ぎましたが、途中満人に遭うと私物は取られてしまうので逃げるばかり。今までを思うと、敗戦とは何と情けないものだと言感した。昨日までは満人などには目もくれなかったのが、敗戦国人となれば弱いものだと思ひながらの逃避行でした。

やがて、着いた町が鞍山製鉄所のある町だったので

多くの日本人もいましたし、寮も独身寮の空いた部屋もあるというので、お願いして住むことになりました。落ち着くところは出来ましたが、食べるものがない。働いて何とか飯が食えるようにしなければならぬ。働かなければ生きていけない。

そのため、いろいろな仕事、石炭積みなど、どんな労働でも汚れたことでも何でもやりました。昼食は小さな「おにぎり」だけ、本当に腹が空いてグウグウなという、悲しい毎日でした。腹が空いては元気が出ません。日本人のほとんどの人が、食べるために私物を満人に売っては食べていました。そうしなければ、自分は良いとしても子供を養っていけないのです。

だんだんと作業がなくなった頃、今度は中国中央軍（国民政府・蒋介石軍）が進駐してきました。私達は若かったので連行されました。私達には技術があるとのこと、今度は中国軍の車で連行され、中国軍と一緒に働かされました。食べるものはすっかり与えてくれるので、彼らに言われるとおりに雑役をしていました。

その隊に日本語の出来る軍人がおり、今まで何をしたのかを話すと使ってくれる隊があり、その日からは宿舎も寝台で、部屋も隊長の近くでした。トラックの中に機械があり、銃の分解手入れ、部品の取り換え、修理等の作業が与えられました。簡単な仕事なので、何も心配するようなこともなく、月給までいただきました。

九カ月ほど行動を共にして各地を移動していましたが、ある日、新京の街に友人と外出しました。服装は中国服で買物等で街中を散歩していると、「日本人引揚居留民会事務所」があったので、友人と一緒に訪ね入りました。何しろ服装が中国軍人の服装だったので、説明に時間がかかりましたが、理解をしてもらい状況を知らされました。

すると、この街の帰国事務所も十月で閉鎖することゆえ、「一緒に帰ったら」と言われました。二人で相談をし、出発の日まで詳細に記録し部隊に帰り、他の兵隊には何も話さず隊長に相談やらお願いをしました。隊長からは心良く許可していただき、帰るまで

は作業に一生懸命に努めました。出発の朝、隊長や班長に報告し、出発時、トラックで送っていただきました。

隊では、長い間ご苦労と言って、五十元いただきました。一緒に半年以上生活をしていたので、心も通じあえたため、大変うれしかったです。

汽車に乗ったのが、十月五日頃だったと思います。三日間ぐらい走って葫蘆島付近の収容所に泊まって乗船の来る日を三日ぐらい待っていました。

乗船の朝、残留の係の人にお礼を述べました。私は、昭和十七年から二十一年十月までの四年半、大陸で生きてきました。話しをすれば限りがありません。苦しかったことも、楽しかったこともありました。今になれば、ずいぶん昔のことで、思いや記憶が後先になっただけかもしれません。しかし、帰国の船に乗るまでは、本当に日本へ帰してくれるのだろうか、と不安でした。乗船してみると船員さんは日本人で、「間違いない。九州の博多へ着く」と言われ本当に安心しまし

た。

戦後五十五年も過ぎました。昭和の初めに生まれた私も、七十五歳になろうとしています。今一つ、不満というか、納得のいかぬ事もあります。私は最後の軍人ではありますが、その前には、第十野戦航空修理廠で少年軍属として満州で勤務してきました。しかし、技官以上でない軍属の扱いはされないということです。

私の戦友も三〇人くらい海底に沈んでいます。私達は軍人と共に鉄帽をかぶり、航空機の整備に三年間も勤務してきました。技官は主に机に向かって仕事をし、私らは空襲時でも航空機を守っていました。技官には弾が当たらず我々には弾が当たる率が高いのです。工員は雪の中、雨の中でも寒さに耐えてきた人間です。

私達には戦友会もあります。愛知県蒲郡市の三ヶ根山には立派に第八三五部隊の石碑が建てられています。私達は慰霊祭を挙げて靖国神社に参拝もして

おります。このようなことをここで申すことをお許しください。

第八三五五部隊、第一独立整備隊、慰霊之碑の裏面には次の文が刻まれております。

『満州杏樹ニテ航空機整備比島派遣隊野隊長以下
一二五名編成昭和十九年六月十日出発、シー海峽ル
ソン島バナイ島ニ転戦勇猛果敢屍乗越奮戦隊長外九
十余名ノ尊キ御霊ノ冥福ヲ祈リ建立ス

生存者有志』

日支事変当初の

陸軍航空隊の活動

島根県 陶 山 友 也

父は隣村、三刀尾町栗田の生まれで、大阪の砲兵工廠に勤務中、私は大阪で生まれ育った。五歳の時、父と共に木次町に帰省し、小学校を卒業後、出雲市の旧

家遠藤嘉工門邸に奉公に出され、しつけを受けながら学業を終えました。

学校卒業後、出雲製織株式会社に機械工として働いた後、父の家業の板金職を手伝って、昭和十(一九三五)年徴兵検査を受け甲種合格で、翌十一年一月、現役兵として入隊しました。

入隊の時、兵科が航空整備兵と称する当時としては驚異な兵科に指定されていきました。私が板金職だったのが買われた兵科選定であったと思います。家族や故郷に別離を告げ広島に集合し、ただちに宇品港を出港し女界灘を三百人ぐらいの初年兵の引率者に従い大連港に向かって出航しました。乗艦と同時に小さな洗面器が各人に支給されました。航海途上船酔嘔吐のためでしたが、幸いにも大荒れにはならず、何とか無事大連港に到着しました。

大連港にて連隊長にわざわざ出迎えていただいたのは初年兵一同感激しました。ただちに満鉄で一路新京(長春)へと向かいましたが、当時としては満州はまるで夢の国で、遠い昔の日清・日露戦争の古戦場で